

日本周辺高度回遊性魚類資源対策調査（抄録）

田中伸和・藤川裕司・沖野 晃・若林英人*¹

平成8年7月に批准した国連海洋法条約ではマグロ類等について、その保存・管理に協力することとされている。さらに、その実効性を確保するために設けられた協定では、通常以上に厳しい管理処置の適用の導入等が規定されている。このような状況の中、マグロ類資源の安定的な利用の確保のため、我が国周辺および隣接する公海を回遊するこれら資源の科学的データを完備する必要がある。

本調査は、水産庁資源課・遠洋水産研究所主導の下に、データの集計と解析は日本エヌ・ユー・エス(株)が行い、漁獲状況などの調査は関係する21道府県が協力して行った。島根県はヨコワの魚体測定とクロマグロおよびその他のマグロ類に関する伝票調査を行った。

詳細は「平成9年度日本周辺高度回遊性魚類資源対策調査委託事業報告書」に報告されているので、ここではその結果の概要について述べる。

結果の概要

伝票調査

浜田、五十猛、大社、北浜、恵曇、浦郷の各漁協の販売統計書からクロマグロ（マグロ20kg以上、ヨコワ20kg未満）、ピンナガ、メバチについて、月別、漁業種別、漁獲量の集計を行った。また、浜田、五十猛、大社漁協については漁獲尾数の集計も行った。

魚体測定

浜田港、五十猛港、江津港に水揚げされたヨコワおよびコシナガの測定（尾叉長、体重、生殖腺重量など）を実施した。

漁況の概要

- (1) 1996年同様、7～11月にコシナガが漁獲された。各市場ともヨコワとして処理され、今年度の水揚げ統計のヨコワにはコシナガが含まれた数値となっている。
- (2) 主要6市場（浜田、五十猛、大社、北浜、恵曇、浦郷）における1997年のクロマグロ及びコシナガの漁獲量は約530トンと1996年を大きく上回り、ほぼ1995年並みの水準となった。
- (3) マグロが漁獲されたのは定置網と大中型まき網で、主要6市場のうち浜田、大社、浦郷の3市場で水揚げされた。漁獲量は約6.6トンで昨年を大きく上回った。
- (4) マグロは例年4月から8月に定置網に入網し、全体の水揚げの70%以上が6月に集中するが、今年は10月にまき網によって漁獲された。魚体は小さいものが20kg級、大きいものが200kg級であったが、ほとんどは20～30kgの小型個体であった。10月にまき網で漁獲されたのはこのサイズの個体であった。
- (5) 体重20kg未満のヨコワ（コシナガを含む）の水揚げ量は538トンで、昨年（217トン）の約2倍の水揚げがみられた。これは浜田への大中型まき網によるところが大きく、これを除くと昨年の1/3程度の水揚げ（82トン）でしかない。

*¹ 栽培漁業センター

- (6) 本格的なヨコワ漁は9月下旬に始まり10月がピークとなって11月にはほぼ終漁した。この時期に年間の約86%が漁獲され、ほぼ例年どおりの状況であった。
- (7) 大中型まき網によるヨコワの水揚げは5～11月までみられ、10月にピークがみられた。沿岸の曳縄釣は10月下旬に始まり11月中・下旬がピークとなって12月上旬には終漁した。
- (8) 大中型まき網の漁獲サイズは6月では4-5 kg、10月では6-8 kgの個体が主体であり、曳縄釣では3-4 kgの個体が主体となり、漁期後半には4-5 kgのものも見られた。